

# 中国語話者による 非対格自動詞となる漢語サ変動詞の 習得に関する一考察

学習環境及び日本語能力の影響に着目して

劉倩卿

## ◆要旨

本稿では、上級（JFLとJSL）と超級の中国人学習者を対象に、非対格自動詞となる漢語サ変動詞の「漢語+になる／する／される」の使用状況を調査・分析し、学習環境と日本語能力の影響を考察した。その結果、次のことがわかった。正用形式の「漢語+する」は、JSL上級と超級の方が、JFL上級より習得が進んでおり、中国語の動詞に当たる「漢語+する」の方が形容詞に当たるものより習得しやすい。「漢語+になる」の誤用は、中国語の形容詞に当たる場合に生じやすく、学習環境と日本語能力によっては変化しない。一方、中国語の動詞に当たる場合、JFL上級の学習者は誤用しやすいが、在日経験が増え、日本語能力が上がるにつれて減少する。「漢語+される」の誤用は、中国語の他動詞に当たる場合に生じやすく、学習環境と日本語能力によっては変化しない。

## ◆キーワード

漢語サ変動詞、非対格自動詞、中国語話者、学習環境、日本語能力

## ◆ABSTRACT

In this paper, I investigated the acquisition of Sino-Japanese Unaccusative Verbs in Chinese Speakers. The findings are as follows. The regular form of *Suru* is more selected by the advanced JSL and the super-class learners. The erroneous form of *Ninaru*, is more selected in the ones which are adjective in Chinese, and does not vary depending on the study environment and the Japanese level. However, in the ones which are verb in Chinese, *Ninaru* is more selected by advanced JFL learners than advanced JSL and the superclass learners. The erroneous form of *Sareru* is more selected in the ones which are transitive verb in Chinese, and does not vary depending on the study environment and the Japanese level.

## ◆KEY WORDS

Sino-Japanese Verbs, Unaccusative Verbs, Chinese speakers, study environment, Japanese level

A Study about the Acquisition of Sino-Japanese  
Unaccusative Verbs in Chinese Speakers  
Focusing on the Effect of Study Environment and  
Japanese Level

QIANQING LIU

# 1 はじめに

日本語の漢語サ変動詞のうち、中国語話者にとって、非対格自動詞の習得は難しいとされている(庵2010a, 2010b)。例えば、「開通する」は「\*開通される」(庵2010a, 2010b)、「低下する」は「\*低下になる」(五味ほか2006)と誤用しやすい。その原因として、中国語からの負の転移と認知的な要因が指摘されている。「漢語+される」形を使うのは、中国語の他動詞用法に影響され、「外的な力」を感じるためである(庵2010b)。「漢語+になる」形を使うのは、中国語の形容詞用法に影響され(五味ほか2006)、「状態の変化」と捉えられる(劉2020)ためである。また、劉(2020)では、「される」と「になる」の誤用は、日中語の自他・品詞のずれがある語のみならず、ずれがない語でも誤用が生じると観察されており、認知的要因が主な原因であることが示唆された。

しかし、以上のような現象は、学習環境と日本語能力のレベルの影響については検討されていない。本研究では、JFL上級、JSL上級、超級の中国人学習者を対象に、非対格自動詞となる漢語サ変動詞の習得状況を調査し、母語の影響、認知的要因、学習環境と学習レベルの影響を解明したい。

## 2 先行研究

### 2.1 非対格自動詞となる漢語サ変動詞

Perlmutter(1978)の「非対格性の仮説」によると、自動詞が統語的な振る舞いによって2種類に分かれるとされている。つまり、自動詞は非対格自動詞(unaccusative intransitive verb)と非能格自動詞(unergative intransitive verb)に分かれるとされる(庵2010a, 2010b)。

庵(2010b)によると、非対格自動詞とは、D-構造で項が動詞の目的語の位置に生成し、S-構造でそれが主語の位置に移動するものである。一方、非能格自動詞とは、D-構造で既に項が主語の位置に生成しているものである。

#### (1) 【非対格自動詞】

コップが割れた。

D-構造 [se[VP 割れた コップ]] (eは空範疇)

S-構造 [s コップ<sub>i</sub>が[VP 割れた t<sub>i</sub>]] (tは移動の痕跡)

#### (2) 【非能格自動詞】

太郎が走った。

D-構造 [s 太郎[VP 走った]]

S-構造 [s 太郎が[VP 走った]]

(庵2010b: 175-176)

また、非対格自動詞と非能格自動詞の区別は、意志的自動詞と非意志的自動詞<sup>[註1]</sup>の区別と類似している。庵(2010b)は、意志形がとれる、命令形がとれるという2点を基準とし、これらが可能なものを非能格自動詞、不可能なものを非対格自動詞と見なしている。つまり、非能格自動詞は主語にあたるものの意図的な動きを表す動詞であり、非対格自動詞は主語にあたるものの意図と関係なく起こる変化や状態を表す動詞である(高2017)。

漢語サ変動詞は、自動詞、他動詞、自他両用に分類した先行研究が多い(影山1996, 小林2004, 張2014など)が、庵(2008)は、自動詞の漢語サ変動詞をさらに非対格自動詞と非能格自動詞に分類している。非対格自動詞となる漢語サ変動詞は、(3)と(4)のように、自動詞文では「漢語+する」形を使い、他動詞文では「漢語+させる」形を使うのが一般的である。「漢語+させる」形は、「非対格自動詞の他動詞形」と呼ばれている(庵2010a)。

(3) 自動詞文: [NP<sub>2</sub> が 漢語する]

他動詞文: [NP<sub>1</sub> が NP<sub>2</sub> を 漢語させる]

(4) 自動詞文: a. 地球の温度はこの10年で1度上昇しました。

b. この分野は急速に発展しました。

他動詞文: c. 彼女は容器を熱して、中の水の温度を上昇させました。

d. 彼はこの国の経済を発展させました。(庵2010a: 108-111)

本稿では、(4) aとbのような自動詞用法、即ち[NPが～する]という形式

に注目する。つまり、「物事や人の状態の変化」を表す際に、中国語話者が漢語サ変動詞を使用する実態とその要因を明らかにしたい。

## 2.2 漢語サ変動詞に関わる日中対照研究

日本語と中国語の同形語における文法的なずれに関する対照研究では、両言語の間に品詞と自他のずれがあることが指摘されている(石・王1984, 中川2005など)。品詞のずれは、「緊張、低下、孤立、充実」などは日本語ではサ変動詞として用いられるが、中国語では形容詞であるという区別を指している。自他のずれは、「発展、分裂、成立、普及」などは日本語ではサ変動詞が自動詞として用いられるが、中国語では他動詞であるという区別を指している。

## 2.3 中国語話者による漢語サ変動詞の習得研究

庵(2010b)は、初級、中級、上級の学習者を対象とし、非対格自動詞と非能格自動詞の「漢語+する/される」<sup>[註2]</sup>という形式の使用について調査した。その結果によると、非能格自動詞は一律に「する」の回答が多いのに対して、非対格自動詞の中で、(5)のように「進行、拡大、開通」は「される」の回答が多い。また、中国語における用法の分布に対する調査によると、「進行、拡大、開通」の3語は他動詞の用法が優勢であるため、「される」の使用は中国語の転移によるものであると考察されている。さらに、超級学習者の内省によると、事態の成立に「外的な力」が感じられるかどうか「される」の使用動機であるということも示唆されている。

- (5) a. \*家の近くに長いトンネルが開通されました(→開通しました)。  
b. \*日本では経済的格差が拡大されました(→拡大しました)。  
c. \*パーティーは順調に進行されました(→進行しました)。

(庵2010b: 178-179より)

五味ほか(2006)では、上級学習者による作文コーパスから、(6)のような「漢語+になる」という誤用が観察されている。このような誤用が見られた語は、「変化」を表す二字漢語が多く、日本語ではサ変動詞化しなければいけないが、

日中語の品詞のずれによって、中国語話者は名詞またはナ形容詞として捉えやすいと述べられている。しかし、(6) cとdのように、中国語の動詞に当たるものでも「になる」を使う用例が観察され、これらは品詞のずれによる誤用とは言えないが、その原因については言及されていない。

- (6) a. \*数学的能力が低下になる(→低下する)。  
b. \*内面が成熟になる(→成熟する)。  
c. \*治安が改善になる(→改善する/される)。  
d. \*娯楽産業がだんだん消失になる(→消失する)。(五味ほか2006: 5-6より)

劉(2020)は、変化を表す際に、中国語話者による漢語サ変動詞の使用が{漢語+になる/する/される}の3つの形式に分布すると設定し、JFL上級学習者を対象にアンケート調査とフォローアップインタビュー(以下はFI)を行った。その結果、日中語のずれが唯一の原因ではなく、認知的要因も働くことが明らかになった。「になる」の使用は、主に中国語の形容詞用法に影響されるが、形容詞用法がない語でも「になる」を使うのは状態の変化を感じるためだと示唆された。「される」の使用は、主に中国語の他動詞用法に影響されるが、中国語に他動詞用法がない語でも「される」を使うのは、働きかけや外部からの影響を感じるためであると示唆された。一方、「する」は正しく使えるが、(7)のように、変化ではなく、人の動作、単純状態や変化後の状態を表すと捉えるため、変化を表すには「する」を使いにくい原因が解明されている。

- (7) a. 今回の研修で、自分が成長した。(人の動作)  
b. 現状が複雑すぎて、頭が混乱しました。(単純状態)  
c. 組織された政治勢力が分裂しました。(変化後の状態) (劉2020: 122より)

以上述べてきたように、従来の研究では、中国語話者が非対格自動詞となる漢語サ変動詞を使用する際に、母語の影響及び認知的要因によって、「漢語+する」形の正しい使用と理解ができず、「漢語+になる」や「漢語+される」と誤用しやすいということが明らかになった。しかし、主にJFL上級学習者だ

けを調査対象としているため、JSL上級学習者、及び上級以上の超級学習者の習得状況を明らかにするためには、さらに調査する必要がある。

### 3 研究課題

本研究では、学習環境 (JFLとJSL) 及び学習レベル (上級と超級) を考慮に入れると、使用実態がどのように変化するか、及びその要因を明らかにしたい。研究課題は以下の2点である。

- ①非対格自動詞となる漢語サ変動詞を使用する際、{になる／する／される}の選択の傾向は、学習環境と日本語能力によって異なるか。
- ②非対格自動詞となる漢語サ変動詞の習得に関わる中国語の影響及び認知的要因は、学習環境と日本語能力によって異なるか。

## 4 調査の概要

### 4.1 被験者

被験者はJFL上級学習者30名、JSL上級学習者30名、超級学習者12名である。それぞれの概要は、表1の通りである。

表1 被験者の概要

レベルと環境	学習歴 (平均)	日本滞在歴 (平均)	N1合格時
JFL上級 (30名)	4年6ヶ月	なし	2018～19年
JSL上級 (30名)	4年10ヶ月	3年8ヶ月	2018～19年
超級 (12名)	10年6ヶ月	6年8ヶ月	-

本稿では、学習歴が4～5年であり、日本語能力試験N1に合格していることを上級とする。JFL上級は中国の大学で日本語を専攻とする学部生と院生であり、JSL上級は日本の大学で勉強している学部生と院生 (専攻は決まっていない) である。また、学習歴が10年以上、日本滞在歴が5年以上であることを超級と

する。超級学習者は、日本の大学で日本語学、日本語教育、日本文学を専門として研究している博士後期課程の院生である。

### 4.2 調査対象語と調査文

まず、調査対象語は、日中同形同義の二字漢語の非対格自動詞であり、計32語である。調査対象語の選別には、以下の手順で作業を行った。

①『日本語能力試験出題基準』(2007) 1級～4級に含まれている日中同形同義の二字漢語から、茶まめ<sup>[註3]</sup>を用いて品詞に「サ変可能」を含むものを取り出した。同形同義は、中国語母語話者 (日本語教育専門の博士後期課程の大学院生2名) の協力で判断した。同形同義語を対象とするのは、未習及び意味の誤解による誤用を排除するためである。

②日本語では非対格自動詞である語を抽出する。まず、張 (2014) を参照し、自動詞に相当するものを抽出する。それから、日本語母語話者 (日本語教育専門の博士後期課程の大学院生1名) の協力で意志形と命令形が取れないもの、即ち非対格自動詞を抽出する。

③劉 (2020) を参照して中国語の用法別に分類する<sup>[註4]</sup>。まず、中国語では一般的には「NP<sub>2</sub> + 形容詞・動詞 + 了」という形で「変化」を表すため、「NP<sub>2</sub> ~ 了」が状態変化を表す語を抽出し、中国語話者が「漢語 + になる／する／される」を使いうる語と見なす。次に、中国語の形容詞用法と他動詞用法が主な干渉の要因とされているため、程度副詞“很” (とても) などと共起するものを形容詞とし、[NP<sub>1</sub> ~ NP<sub>2</sub>]の形式が使えるものを他動詞として分類する。以上により、表2に示した4種類となる。

表2 中国語の用法による分類

中国語の種類	[NP <sub>2</sub> ~ 了]	“很”	[NP <sub>1</sub> ~ NP <sub>2</sub> ]
形容詞	○	○	×
自動詞	○	×	×
形容詞・他動詞	○	○	○
他動詞	○	×	○



- (8) a. 形容詞：昔に比べて格段と美容外科の技術も進歩 {\*になった/した}。  
 b. 自動詞：寒さで水道管が破裂 {\*になった/した}。  
 c. 形容詞・他動詞：ホームページは全面にリニューアルし、内容も充実 {\*になった/した/\*された}。  
 d. 他動詞：自動車業界で名を馳せる3つの会社が合併 {\*になった/した/\*された}。

一方、3つの被験者群の平均得点を比較すると、「になる、する、される」を選択する傾向が変化することが観察された。JFL上級、JSL上級、超級という順で、「する」の得点が高くなり、「になる」と「される」の得点が低くなる傾向が示された。

以下で、非対格自動詞となる漢語サ変動詞の習得に及ぼす中国語の類型と学習環境・レベルの影響を検討するため、正用形式「する」、誤用形式「になる」と「される」について、中国語の類型（形容詞、自動詞、形容詞・他動詞、他動詞の4水準）と学習環境・レベル（JFL上級、JSL上級、超級の3水準）の4×3の二元配置の分散分析を行った結果を分析し、その要因を考察していく。

### 5.1 正用形式「漢語+する」の使用

「する」の場合は、中国語の類型と学習環境・レベルの交互作用が有意ではなかった。中国語の類型の主効果だけが有意であった ( $F(3,207)=39.47, p<.01$ )。多重比較を行った結果、「自動詞>他動詞=形容詞>形容詞・他動詞」( $MS_e=0.24, p<.05$ )という順で「する」を有意に多く使っている。まず、自動詞は日本語の類型と最も近いため、母語の干渉が最も少なく、「する」を産出しやすい。次に、他動詞と形容詞の間に有意な差は見られなかった。他動詞の場合は「される」、形容詞の場合は「になる」と誤用しやすいため、「する」の産出に影響を与える。最後に、「形容詞・他動詞」の場合、「になる」も「される」も誤用しやすいため、「する」の産出が最も困難である。この結果から、中国語の影響によって正用形式「する」の使用傾向が異なると言える。

一方、学習環境・レベルの主効果が有意ではなかったが、有意傾向を見せて

いた ( $F(2,69)=2.48, p<.10$ )。多重比較を行った結果、JFL上級はJSL上級と超級の間に有意な差が見られた (超級=JSL上級>JFL上級,  $MS_e=0.97, p<.05$ )。つまり、超級とJSL上級の学習者は、JFL上級の学習者より「する」の習得が進んでいると言える。また、FIの結果によると、JFL上級では、「事実の叙述」を表す際に「する」が自然であると答えるのが11人なのに対して、JSL上級では2人であった。この「事実の叙述」は、劉(2020)のFIの結果と一致し、「変化」ではなく、単純状態や変化後の状態を述べる際に「する」を使うという使用動機のためだと考えられる。一方、「する」が「変化」を表すと答えるのは、JFL上級には5人いるのに対して、JSL上級には8人いる。この結果から、「する」の習得は、学習環境に影響されると言える。つまり、JFL学習者は、日本語の「漢語+する」という形式を、「変化動詞」の機能と対応づけられていないのに対して、JSL学習者は、在日経験が増え、日本語のインプットが多くなるにつれて、「する」を「変化」と対応づけられるようになる。

表5 「漢語+する」が「自然」と回答する理由のまとめ

FIの答え	JFL上級 (N=30)	JSL上級 (N=30)
主動的な動作	11	13
事実の叙述	11	2
変化	5	8
サ変動詞の語尾	4	5
自動詞	3	5
直感	0	3

※数字は回答数を示す。複数回答があるため、合計が人数を超えている。

### 5.2 誤用形式「漢語+になる」の使用

「になる」の場合は、中国語の類型と学習環境・レベルの交互作用が有意である ( $F(6,207)=4.54, p<.01$ )。そこで、中国語の類型の単純主効果を学習環境・レベルの水準ごとに検定したところ、3つの被験者群とも有意な差が見られた (JFL上級:  $F(3,207)=10.84, p<.01$ , JSL上級:  $F(3,207)=20.98, p<.01$ , 超級  $F(3,207)=43.49, p<.01$ )。それぞれの結果を図式化すると、表6の通りである。いずれの被験者群でも形容詞と形容詞・他動詞は「になる」を使う傾向があるが、他動詞と自動詞の場合

は、被験者群の間に差が見られた。

表6 中国語の類型別に見た「になる」の使用比率

JFL上級	形容詞>(形容詞・他動詞=自動詞)>(他動詞=自動詞)
JSL上級	形容詞>形容詞・他動詞>他動詞>自動詞
超級	形容詞>形容詞・他動詞>他動詞=自動詞

次に、学習環境・レベルの単純主効果を中国語の類型の水準ごとに検定したところ、形容詞用法のある語では有意ではなかったが、形容詞用法のない語では有意であった(自動詞:( $F(2,69)=8.92, p<.01$ ), 他動詞:( $F(2,69)=6.03, p<.01$ )。多重比較を行った結果、自動詞の場合、超級はJFL上級とJSL上級の間有意な差が見られた(JFL上級=JSL上級>超級,  $MSc=0.64, p<.05$ )。他動詞の場合、JFL上級と超級の間有意な差が見られた(JFL上級>超級,  $MSc=0.40, p<.05$ )。

以上の分析結果から、学習環境・レベルにかかわらず、中国語の形容詞用法に影響され、「になる」を使う傾向があることがわかった。一方、中国語に形容詞用法がない場合、在日経験が増え、日本語能力が上がるにつれて、「になる」の使用が減少することが明らかになった。5.1の分析で、JSL上級と超級の学習者と比べると、JFL上級の学習者は「する」を「変化」と対応づけられないことがわかっており、「変化」を言語化して「になる」形を多く使うと考えられる。

例えば、中国語には、(9)の「進歩」は形容詞用法があるが、(10)の「上昇」は形容詞用法がない。しかし、JFL上級の学習者はいずれも「になる」を使う傾向があるのに対して、JSL上級と超級の学習者は「上昇になる」の使用が少なくなる。

(9) a. \*昔に比べて格段と美容外科の技術も進歩になった(→した)。

b. 与过去相比, 美容外科技术大大进步了。

(10) a. \*6月の失業率は2ヶ月ぶりに上昇になった(→した)。

b. 时隔两个月, 6月的失业率又上升了。

そのため、教育現場では、「漢語+する」の形で変化を表すと積極的に導入する必要があると考えられる。なお、中国国内の日本語教育では、「漢語+

る」が「変化」を表すという規則の導入が十分ではないため、JFL学習者が「する」より「になる」を使用する可能性がある。この点については、今後教材分析に基づく検討が必要である。

### 5.3 誤用形式「漢語+される」の使用

「される」の場合は、学習環境・レベルの主効果、交互作用は有意ではなかったが、中国語の類型の主効果だけが有意であった( $F=107.21, p<.01$ )。多重比較を行った結果、他動詞用法のある語と他動詞用法のない語の間に有意な差が見られた(他動詞=形容詞・他動詞>自動詞>形容詞,  $MSc=0.16, p<.05$ )。

このことから、中国語の他動詞用法に影響され、「される」の誤用が生じやすいと言える。なお、学習環境・レベルは影響を与えず、日本語能力が上がり、在日経験が増えるとしても、母語の影響が抑制できず、「される」の誤用が消滅しにくいことがわかった。

では、中国語の他動詞用法がどのように影響しているのか。例えば、(11) aのような調査文では、「充実」は中国語の形容詞・他動詞であるため、「される」と誤用している。しかし、(11) bの中国語訳を見ると、中国語では有標の受身マーカー“被”を使うと不自然になるため、「される」の使用は中国語の有標の受身形式の影響とは言えない。ただし、(11) cのように、中国語の「充実」は、日本語のように使役形に変える必要がなく、そのまま他動詞として用いられるため、中国語話者は日本語の「充実する」を他動詞として捉え、その受身形「充実される」を使うのではないかと考えられる。

(11) a. \*ホームページは全面にリニューアルし、内容も充実された(→した)。

b. 网页全面更新了, 内容也充实了。(内容也被充实了。)

c. 我们充实了网页的内容。(私たちはホームページの内容を充実させた。)

劉(2020)では、「働きかけや影響を受けて変化が生じる」と捉えるという認知的要因は、中国語の他動詞用法の有無にかかわらず、「される」の使用に影響を与えるということが明らかになっている。ただし、他動詞用法のある語は、[NP<sub>1</sub> ~ NP<sub>2</sub>]の他動詞文が使えるため、NP<sub>1</sub>に当たる動作主や原因の存在

が感じられやすい。そのため、中国語では有標の受身マーカ―が必須ではないにもかかわらず、中国語話者が日本語の他動詞として捉え、その受身形を使うと考えられる。このタイプの語は、超級に至っても「される」の誤用が消滅しにくいことから、中国語話者にとって習得の困難点であると言える。教育上では、リストアップして明示的に教える必要があると考えられる。

## 6 まとめ

本稿では、JFL上級、JSL上級、超級の中国人日本語学習者を対象に、非対格自動詞となる漢語サ変動詞の「漢語+になる／する／される」の選択傾向を調査し、その要因を考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

①正用形式「漢語+する」は、全体的に容認度が高い。なお、中国語の動詞の方が、形容詞より使いやすい。また、JFL上級の学習者は「する」を「変化」と対応づけられないため、その使用が比較的少ない。在日経験が増え、日本語能力が上がるにつれて「する」の習得が進む。

②誤用形式「漢語+になる」は、中国語の形容詞の場合に選択する傾向がある。このような影響は、学習環境と日本語能力によって変化しない。一方、中国語の動詞の場合に認知的要因によって「になる」を使う現象は、在日経験が増え、日本語能力が上がるにつれて減少する。

③誤用形式「漢語+される」は、中国語の他動詞の影響によって選択する傾向がある。その影響は、学習環境と日本語能力によって変化しない。

なお、残された課題がいくつかある。まず、本稿では日中同形同義語しか検討できていない。今後は同形類義・異義及び中国語に存在しない漢語動詞の使用実態も調査する。また、非対格自動詞の他動詞用法（「させる」）についての検討も今後の課題とする。さらに、中国語話者を対象とする日本語教育では、漢語サ変動詞に関する有用な指導対策及び語彙リストを提案することを目指して研究を進めていきたい。

〈一橋大学大学院生〉

## 注

- [注1] …… 庵ほか (2000:96) によると、自動詞は、「走る、泳ぐ」のような意志的自動詞と「割れる、落ちる」のような非意志的自動詞に分かれる。
- [注2] …… 庵 (2010b) は、問題文は「拡大する、拡大される、拡大させる」の三者から選ぶという形と設定されているが、自動詞文を考察対象としているため、「する」と「される」の回答数のみを集計している。
- [注3] …… Web茶まめ (<https://chamame.ninjal.ac.jp>) を使用した。
- [注4] …… 劉 (2020) は、中国語では「“变得”(なる)+形容詞」という形式を使う形容詞と「形容詞+“了”(た)」を分けて検討しているが、本稿は後者のみを調査対象とする。
- [注5] …… 「混乱、進歩、緊張、流行、発達、蒸発、成長、普及、集中、増加、開通、成立、発展、悪化」の14語が2級であり、それ以外は1級である。本稿では、1級と2級の難易度による影響を検討しない。
- [注6] …… <https://tsukubawebcorpus.jp>

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山岡敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄 (2008) 「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』11, pp.47-63.
- 庵功雄 (2010a) 「中国語母語話者による漢語サ変動詞のボイス習得研究のための予備的考察」『日本語/日本語教育研究』1, pp.103-118. 日本語/日本語教育研究会
- 庵功雄 (2010b) 「中国語話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一考察—非対格自動詞の場合を中心に」『日本語教育』146, pp.174-181. 日本語教育学会
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版
- 高恩淑 (2017) 「日本語学習者に対する漢語サ変動詞の導入について—韓国語母語話者への誤用対策を中心に」『人文・自然研究』11, pp.115-129. 一橋大学教育開発センター
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 五味政信・今村和宏・石黒圭 (2006) 「日中語の品詞のブレイク—二字漢語の動詞性をめぐって」『一橋大学留学生センター紀要』9, pp.3-13.
- 石堅・王建康 (1984) 「日中同形語の文法的ずれ」『日本語と中国語の対照研究 別冊—日文中訳の諸問題』pp.57-82. 日本語と中国語対照研究会
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版
- 中川正之 (2005) 『漢語から見える世界と世間』岩波書店
- 劉倩卿 (2020) 「中国語話者による漢語動詞の使用に関する一考察—「変化」に関わる動詞を中心に」『中国語話者のための日本語教育研究』11, pp.112-127. 中国語話者のための日本語教育研究会
- Perlmutter, D. M. (1978) Impersonal Passive and Unaccusative Hypothesis. *Berkeley Linguistic Society*, 4, pp.157-189.



参考資料 調査文の一覧（※実際の調査ではランダムにして提示した。）

中国語の類型	調査文
形容詞	1. 背骨がずれると、骨を支える筋肉が緊張（A緊張になったB緊張したC緊張された）。 2. 雇用の場が失われ、少子高齢化と相まって国内市場が（A飽和になったB飽和したC飽和された）。 3. わが国の社会は高度経済成長を経て社会・文化的に（A成熟になったB成熟したC成熟された）。 4. 昔に比べて格段と美容外科の技術も（A進歩になったB進歩したC進歩された）。 5. 現代は1000年前よりも遥かに科学が（A発達になったB発達したC発達された）。 6. 冬の時期になればインフルエンザが（A流行になったB流行したC流行された）。 7. 人々の不安が高まる中、ツイッター上で誤った情報が（A氾濫になったB氾濫したC氾濫された）。 8. いろんな事を考えていたら、頭が（A混乱になったB混乱したC混乱された）。
自動詞	1. 6月の完全失業率は2ヶ月ぶりに（A上昇になったB上昇したC上昇された）。 2. 寒さで水道管が（A破裂になったB破裂したC破裂された）。 3. マヤの予言では人類が（A滅亡になったB滅亡したC滅亡された）。 4. 保険も時代とともに（A進化になったB進化したC進化された）。 5. この注射を受けると、発熱などの症状が（A出現になったB出現したC出現された）。 6. この体験によって、私は少し（A成長になったB成長したC成長された）。 7. その後も政策の失敗で、10年以上も景気が（A停滞になったB停滞したC停滞された）。 8. 気温が上がるので、ますます水が（A蒸発になったB蒸発したC蒸発された）。
形容詞・他動詞	1. 地方の人々が多くやって来て、国内が（A繁栄になったB繁栄したC繁栄された）。 2. このページ、不動産屋と内容が（A重複になったB重複したC重複された）。 3. 気にしないようにしているのに、そう思えば思うほど、そこに意識が（A集中になったB集中したC集中された）。 4. 彼が来るという知らせを受けて、気持ち（A動揺になったB動揺したC動揺された）。 5. ホームページは全面にリニューアルし、内容も（A充実になったB充実したC充実された）。 6. 日本では早くから義務教育が（A普及になったB普及したC普及された）。 7. 農村部では、労働人口が減って農地が（A荒廃になったB荒廃したC荒廃された）。 8. 新潟県中越地震の時には、61の集落が（A孤立になったB孤立したC孤立された）。
他動詞	1. 治療しないと、症状が（A悪化になったB悪化したC悪化された）。 2. 冬場は寒くてジュースの消費量が（A減少になったB減少したC減少された）。 3. 最近、インドのウイスキーの生産量が（A増加になったB増加したC増加された）。 4. 内モンゴルは、1947年に自治政府として（A成立になったB成立したC成立された）。 5. 彼は権力の頂点で倒れ、その王国は（A分裂になったB分裂したC分裂された）。 6. 2004年10月、自動車業界で名を馳せる3つの会社が（A合併になったB合併したC合併された）。 7. 明治5年に新橋～横浜間に鉄道が（A開通になったB開通したC開通された）。 8. 後期ロマン派音楽は、主にドイツで（A発展になったB発展したC発展された）。